

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目	雑誌『満蒙』における文芸とその時代 ——在満日本人の満洲観を視座にして
氏 名	王 占一

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、雑誌『満蒙』（前身誌の『満蒙之文化』を含む）を研究対象とするものである。前身誌の『満蒙之文化』は1920年9月に満蒙文化協会から発刊され、1923年4月に「満蒙」と改題され、終刊の1943年10月まで全281号が刊行されている。四半世紀にわたって発刊され続けた本誌は、在満日本人によって創刊された「満洲」での最大の満・蒙に関する総合月刊誌であるといえよう。

『満蒙』に現れた主な文芸は、文芸評論、旅行記、翻訳文学、詩歌（民謡、漢詩、短詩、短歌、俳句、川柳）、小説、戯曲脚本、随筆、雑記などが挙げられる。これらの文芸作品は、多分野にわたる在満日本人によって創作されたもので、在満日本人の「満洲観」を反映している。そのため、本文論では雑誌『満蒙』を考察する際に「満洲観」を研究の視座とした。

序章では、「満洲観」の概念、在満日本人の文芸活動、雑誌『満蒙』の概況及びその「半官半民」の性質、戦後に開始され「満洲」時代の日本語雑誌の復刻を解説した上で、『満蒙』研究の可能性を示した。

第一部の「調査された「満洲」——「満洲国」成立前の旅行記、翻訳、詩歌」において、1920年代における在満日本人の文芸活動（旅行記の創作、中国文学の翻訳、民謡の翻訳と創作）の考察を通じて、調査される対象という在満日本人の満洲印象を提示した。

第1章の「「富源」としての満蒙——戦前の旅行記」では、『満蒙』に掲載された旅行記「満洲の自然美」と「東蒙騎馬横断記」を研究テキストにして、富源としての「満蒙」という在満日本人の抱いた印象を検討した。1920年代の旅行記からは「満蒙」の富源を調査する在満日本人の眼差しが読み取れるのである。

第2章の「「支那像」を求める——在満日本人による中国民謡の翻訳と創作」では、中国の国民性を調査する手段として利用された中国民謡を分析した。1920年代に在満

日本人は中国民謡に注目し始め、多くの中国民謡を翻訳・創作した。在満日本人は民謡を通して、「安楽」な労働生活、「勤勉至上」「金銭至上」という中国人の価値観を表した。つまり、在満日本人は民謡の翻訳と創作を通して「支那像」を求めていたのである。

第3章の「翻訳手法から見た「支那趣味」——柴田天馬の和訳『聊齋志異』では、『満蒙』で掲載された柴田天馬訳の『聊齋志異』を考察対象にし、「支那趣味」を強調するためにルビと訳注を併用するという訳し方を検討した。天馬は大量のルビと訳注を通じて、中国の文化、伝統、習慣などを詳しく紹介している。

第二部の「宣伝された「満洲」——1930年代の小説、戯曲」においては、「満洲国」を背景にして創作された小説と戯曲脚本を取り扱い、宣伝された「満洲」という満洲印象を示した。「満洲国」成立後には、「建国宣伝」、及び「王道楽土」「五族協和」という理念の宣伝が要求された。

第4章の「「満洲国」の中のスパイ／スパイ戦——近東綺十郎のスパイ小説『間諜・茉莉—映画小説風—』では、『満蒙』に掲載されたスパイ小説を分析した。スパイ小説の出現は当時の都市発展による都市文化の成熟及び探偵小説などの通俗文学の流行と関係がある。スパイ小説の最も大きな特徴は時局と接することである。『間諜・茉莉—映画小説風—』においては、主人公の茉莉の父親が日本人であり母親が満洲人であるという設定は、「満洲国」の「五族協和」の理念を宣伝しているのではないかと思われる。

第5章の「「満洲国」の成立と「建国宣伝」——大庭武年の戯曲創作」では、『満蒙』に掲載された大庭武年の戯曲脚本を分析し、作中に現れた「満洲国」の国策を宣伝する一面を検討した。大庭は満鉄に入社する前に、自身の「満洲国」経験と歴史の教養を活用し歴史・政治・人物に重心を置くという戯曲創作の手法を作り出し、歴史及び軍閥闘争の角度から「満洲国」の正当性を唱えていた。1934年に大庭が満鉄に入社した後には鉄道保護を宣伝する戯曲「劉愛護村長」が発表され、明確な国策宣伝者の姿が現われた。

第三部の「問題視された「満洲」——1940年代の随筆、旅行記、同人雑記」においては、田口稔の旅行記と「満蒙社」同人の文芸活動を考察した。1939年2月から「満洲文化協会」にかかわって「満蒙社」同人は雑誌『満蒙』を編集し始め、それと同時に雑誌の誌面も一新した。

第6章の「北満洲の世相を見る——田口稔の旅行記」では、田口稔の旅行記、特に作者が北満洲を旅して書き上げた「遼江記」と「江上抄」を中心に分析した。北満洲を重要な開発の地、「黄金世界」、多民族群居の地として描いて「満洲国」への移民政策に迎合していた一方で、当地の人々の生存状態を描写する際には、苦力の悲惨な生活、白系ロシア人漢人を嫌っていること、天草女の墓地、在満日本婦人の帰国願望、

阿片中毒者などの、移民政策に逆らう内容も書いた。

第7章の「文化建設と物質生活との間の乖離——満蒙社と「同人雑記」」では、「満蒙社」の「同人雑記」を考察した。「同人雑記」には大連の社会問題が数多く書かれている。雑記に反映された中国の下層民衆の物質生活の低下という現実と、「文化の宣布」という「長期建設」の目標との間には大きな乖離が見えてくる。つまり、「満蒙社」同人らの求めた「文化の宣布」と中国の下層民衆の物質生活の低下との間には鮮明な対立が存在していたのである。

以上をまとめて見ると、「満洲国」成立前の1920年代においては、在満日本人の主な文化活動は「満洲」（あるいは「満蒙」）調査をめぐって展開されていたということが言える。その中でも、旅を通して行われた地理的な調査と、中国民謡と文学作品を考察することで行われた国民性の調査は、在満日本人に重視されていた。しかしこの時期においては、在満日本人の「満洲」への調査は幅広く行われていたものの、当地の在住民とは接触せず、ただ文芸作品などの間接的な資料から着手しただけであったため、一方に偏っている傾向がある。それにもかかわらず、第1章の「富源」としての満蒙観、第2章の「安楽」な労働生活と「勤勉至上」「金銭至上」という「支那」観、及び第3章の文弱と厭世という国民性への発見は、在満日本人の満洲観の一角を表しているのである。1930年代においては、在満日本人の文芸活動は主に「満洲国」の成立及び「王道楽土」「五族協和」の理念への宣伝をめぐって展開されていたといえる。小説や戯曲などの文芸作品は宣伝の手段として利用されており、そこには「満洲国」の「建国理念」と各種の国策が織り込まれている。この時期は、在満日本人の新しいイデオロギー——「満洲国」の国民としての意識——が確立された時期である。それ故に、「満洲」あるいは「満洲国」は新国家として在満日本人によって積極的に宣伝されていたのである。1930年代後半、特に1940年代に入ると、「満洲」には大きな社会問題が存在していたことがわかる。この問題は在満日本人にも意識されていた。彼らの旅行記、随筆、雑記の中で書かれた苦力、泥棒、食料の不足、住宅の問題、各民族の間の不協和などの局面は、当時の「満洲国」の唱えた「王道楽土」「五族協和」の理念に背いている。